

「漁師たちを弟子にする」

2021年10月11日

イエスは、ガリラヤ湖のほとりを通っていたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「私に付いて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。(マルコ福音書1章16節～18節)

神の使命に用いられることへの召し出しを「召命」と言う。旧約聖書には「召命」を受けた人々のことが記されている。モーセの場合、神から「今、イスラエルの人々の叫びが私のもとに届いた。私はエジプト人が彼らを虐げているのを目の当りにした。さあ行け。私はあなたをファラオのもとに遣わす。私の民、イスラエルの人々をエジプトから導き出しなさい」と言われた。出エジプトなどという大事業に恐れをなすモーセに、神は様々な言葉と徴を示すが、モーセは「私は本当に口の重い者、舌の重い者です」と言って固辞する。神は「誰が人に口を与えたのか。…主なる私ではないか。だから行きなさい。私があるあなたの口と共にあり、あなたの語るべきことを教えよう」と言い、強引に召し出している。

モーセは、「召命」に応え、出エジプトという奴隷からの解放を成し遂げていった。預言者たちは、ドラマチックな「召命」を体験している。イザヤは神殿で、聖なる方にまみえ、自分の汚れにおののく。その時、神から「誰を遣わそうか。誰が私たちのために行ってくれるだろうか」との声をきく。イザヤは「ここに私がおります。私を遣わしてください」と、自ら進んで「召命」に応じている。エレミヤは、神から「母の胎より生まれ出る前にあなたを聖別していた。諸国民の預言者としたのだ」と言われたが、彼は「ああ、わが主なる神よ／私はまだ若く／どう語ればよいのか分かりません」と答えている。しかし、「命じることをすべて語れ。彼らを恐れてはならない。この私があるあなたと共にいて、救い出すからだ」と言われ、預言者として立たせられている。神からの「召命」を受けた人々は皆、命にかかわる苦難を負う生涯を送っている。しかし、召し出しに応える彼らに、神の人間への愛が鮮やかに示されている。

主イエスはガリラヤ湖のほとりを歩いておられた。シモン（主イエスから後にペトロと呼ばれる）と彼の弟アンデレは、ガリラヤ湖の漁師であった。主イエスは、二人が網を打っているのを見て、「私に付いて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と呼びかけられた。「私に付いて来なさい」は、主イエスと共にいて神の福音を見聞きし、悪霊を追い出す権能を受けて、福音宣教を担うということである。「人間をとる漁師にしよう」は、魚をとる漁師から、人間を神に連れ戻す牧者になるということである。二人は、主イエスの召し出しに応え、網を、即ち、生活を投げ打って従った。ガリラヤ人は血の気が多く、律儀で、勇敢な気質であったと言われているが、主イエスの一言の招きで、従って行くことなどがあり得るのであろうか。また、ゼベダイ家の息子ヤコブとヨハネが網の手入れをしているのを見て、呼び出されると、父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、主イエスに従った。ゼベダイ家は雇い人がいる「網元」のような漁師であったようだ。実家も職業も捨て、無一文になって、主イエスの後に付いて行った。こんなことがあり得るのであろうか。聖書は、直截に彼らは主イエスの弟子になったと伝えている。召し出す主イエスの言葉と振る舞いに引き出されたのである。彼らは弟子になり、困難と絶望を経験するが、命を賭して福音のために働く栄誉ある生涯へと導かれていく。